

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア食文化紀行

～ナポリ編2～

岡本 勇志

夏ではあるが、京都のような蒸し暑さはなく、カラッとした長閑なポンペイの朝。

いつものようにバールを見つけ、カプチーノにクロワッサン。ポンペイの朝も落ち着きがあり都会のような騒がしさはなかった。ナポリへ帰る電車は昼頃を予定していたので朝はゆっくり散歩することができた。そして、もう一度ドゥオーモの前に座った。なんとなくここが気に入った。一人旅をしていると稀にこういう場所に出会う。『なんとなく離れたくない場所・景色』。このドゥオーモ前が特にそうだった。何も考えずポーっとドゥオーモを見上げてから、お昼のレストラン探しへと出かけた。良さそうなお店を見つけホテルに戻り、管理人の方と挨拶をしてレストランへ行き、少し早めの昼食をとり、ポンペイを後にしてナポリへ。

海沿いを走る電車に揺られること一時間。二度目のナポリ到着。初めて来た時よりは随分慣れたが、やはりどこか構えてしまう。まずは予約しておいたホテルへ向かう。中央駅から少し離れたところにあり、地下鉄で数駅のところである。ナポリの地下鉄は乗るまではやはり少しこわかったが、乗ってみると案外ローマやミラノと変わらず、もっと危険な雰囲気かと思っていたので安心した。ホテルは駅から歩いてすぐ、管理人も優しい人で部屋も綺麗。この、ホテルが安全と分かった時の安堵感は大きい。

さてホテルで一休みしたところで、ナポリに来たら必ず見るべきと聞いていたヴェールに包まれたキリスト(Cristo velato)を觀に Museo Cappella

Sansevero へ向かった。この礼拝堂は細い路地裏にある上に、建物も小さく目立たないため、かなり迷ったすえに到着。

この名物であるキリスト像は、1752年に Giuseppe Senmartino によって作られた大理石の彫刻作品で、キリストがまるでヴェールに包まれ横たわっているように見えるリアルな作品。噂には聞いていたが、初めてこの彫刻を見た瞬間、美術の知識がない私でも驚きを隠せなかった。石を彫ったとは思えないほどで滑らかで、悲しそうに寂しそうで冷たいキリストが本当に目の前にいるような感覚になる、そんな素晴らしい作品だった。また、この礼拝堂はライモンド公が再建したものであるが、彼は錬金術師でもあったと言われ、地下には血管だけの人体像や解剖器具も展示されている。その他にも素晴らしい彫刻があり圧倒された。小さい美術館ではあるが、ナポリに行くなら必ず見ておくべき作品だ。

ここで、少し余談。

イタリアの美術が人を魅了する理由はなんだろう？私は18歳のとき初めてイタリアを訪れた。このときバチカン美術館のミケランジェロの創世記の天井画やシステリーナ礼拝堂の最期の審判を見たとき、思わず涙がでた。

この一人旅の途中でシエナやミラノのドゥオーモを見たとき圧倒され、ミラノの Santa Maria delle Grazie 教会でレオナルド・ダ・ヴィンチの最期の晩餐を見たときもなんとも言えない感情に襲われた。そしてこのナポリのヴェールに包まれた

キリストも同じだ。なぜか？単に作品が技術的に素晴らしいからか？いや違うと思う。

ミケランジェロの天井画にせよ、ヴェールに包まれたキリストやドウオーモにせよ、パソコンなど便利な道具がない時代に何年もの歳月を費やして作り上げたという。きっと芸術家の執念や情熱が今でも生きていて、それがたとえ美術の知識がなくとも観る者に伝わり、圧倒されるのだと僕は思う。そして、そこまで彼らを駆り立てたキリスト教の歴史にも興味が湧く。

さて、話をナポリへ戻そう。

Museo Cappella Sansevero からナポリの街へ繰り出した。まだ晩御飯まで時間があつたので観光地を少し回ること。とは言うものの、さしたるあてもなく、小腹が空いたのでピザ生地を揚げた calzone とビールを買ってブラブラしていると、たまたま Piazza del Plebiscito に着いた。ものすごく広い広場で宮殿と教会がある階段に腰掛け calzone をアテにビールを飲む。個人的に教会やこういう広場の階段に腰掛けて飲むビールが一番うまい。どうまいのかうまく言えないが、あの雰囲気飲むビールは格別だった。小一時間ほどのんびりして教会に入った。かなり大きな教会で、大きな聖者像が数体設置されていて、これにも圧倒された。教会の中で腰かけると、なぜか不思議と落ち着いた気持ちになった。

少し休憩してから海辺へと歩き出した。ナポリの海が夕日に映えてとても綺麗だった。そろそろ晩御飯のレストランを探すことにした。ナポリに来る前に知人から聞いていたレストランはどこも定休日。さあどうしようかと歩いていると、海辺に直感的に良いなと思うレストランを発見。値段もメニューもわからなかったが、この店にしようと思った。おそろおそろ入ってみると良い雰囲気、店員さんも優しい人だった。たまたまその時にお客がほかに誰もいなかったので店員さんとゆっくり話すことができた。

この店は老舗のレストランで、なんと百年も続いているのだとか。注文したのは、タコの前菜と魚介のリングイーネ、そしてもちろん凝灰の土壌で作られたワイン。どれも美味しかった。そして何と言っても最後に食べたナポリの郷土菓子ババ、これが最高に美味かった。ババはキノコのような

形をしているシフォンケーキのようなもので、この店こだわりのリキュールで浸されていた。甘すぎず酒の味が勝つ訳でもなく、絶妙ななんとも言えない味わいがあり、最後のエスプレッソと完璧なマッチだった。ナポリ最後の晩餐も納得いくまで堪能し、素晴らしい思い出になった。



【ナポリ名物ババ】

店を出て、ナポリ最後の夜を歩く。さすが三大都市とあって、街そのものが綺麗だ。ライトアップされた城や教会などが輝いていた。それでも、ふと路地を覗くとナポリの日常がある。おそらくいつものメンバーだろう男達がバールでワイワイガヤガヤ。ピッツェリアでは主人であろう人も客に混じってワイワイガヤガヤ。ナポリ方言で何を言っているのかさっぱりだが、これもまたナポリ。三大都市の観光地、そして路地裏の日常、このナポリの2つの顔を堪能して、いつものよう寝る前のビールを買ってホテルに戻った。

翌日はナポリ中央駅からシエナへ向かう計画だ。ナポリからシエナはバスでおおよそ7時間の長旅。今思うと、もう少し南イタリアを回るプランでもよかったなと少し後悔している。それほどナポリ、南イタリアの雰囲気と味がよかった。

バスで7時間というのは少し不安もあったが、次の都市への期待とナポリへの感謝を胸に、遅くまで響く都会の喧騒を子守唄に眠りについた。

シエナはトスカーナ州で、イタリアのほぼ中心に位置する。今までのナポリとは180度異なり郷土料理といえば肉料理で、ワインはしっかりめの赤ワイン。私が一年仕事していたウンブリア州によく似ている。トスカーナといえばまず思い浮かぶのはフィレンツェだが、私はあえてシエナにした。あまりこれという理由はなかったが、少しマイナーなところに行きたかったのだ。



【ナポリの海辺】

朝早くホテルを出発しナポリ中央駅のバスターミナルで予約していたバスを待つ。

ここで初めて、まさしくイタリアらしいハプニングに出くわすことになる。

日本人の習性か、念のためバスの出発時間より20分ほど早く着くようターミナルへ向かった。バスが到着する時間となりシエナ行のバスを探してみるが見当たらない。『まあイタリアでは時間通りに来ることが珍しいし、気長に待つか』と、焦ることなくまたベンチへ。30分くらいたち、もう一度バスを探しにいくが、まだ見当たらない。『もしかすると待つ場所を間違えたか？』と少し不安になったものの、もう少し待つことにして、もう一度ベンチへ。さらに30分たって、さすがにおかしいとバスターミナルの受付窓口で係の人に聞くと、「このバスは道が混んでいて少し遅れているから、もう少し待って」と言われた。少しも何もすでに1時間ほど来ないと言うと、「分かってるよ。でも僕には何もできないから待つしかない」と言われた。まさにイタリア的対応。なんとなくイタリアを味わったようで面白かった。なんとここからさらに1時間、都合2時間待たされて、ようやくバスが到着。

が、しかし問題はこれだけでは終わらなかった。到着したバスは当初予定のバスからなぜか車種が変更となってサイズが小さくなり、予約した時の席番号がない！座れるところに座ってくれということで、みんなパニック。そのことを知らない人や外国からの観光客でイタリア語も英語もわからない人は運転士の説明が理解できずに大混乱。もともと窓側の席番号だった人は『自分は窓側を

予約したのだから、ここに座る』の一点張り。とにかく座るだけで一苦労だった。席についた後も、遅れてきた人に『あなたが持っている席番号はもうありません』と何度説明したことが。

そしてナポリを出発した後も、混乱はまだ終わらなかった。このバスはナポリからシエナまでの直行ではなく、ローマにも立ち寄ってお客を乗せるのだ。当然ながらローマでもナポリ同様の混乱が起こった。2人以上のグループもバラバラに座って、と乗務員は言うが、家族連れの観光客は「家族全員近いところに座りたい」と怒り出す始末。日本とは違い、乗務員も自分のせいではなく会社が勝手にバスを変更したと、言い訳ばかりでロクな説明もない。結局、私も4回ほど席を代わらされたが、なんとか座ることはできた。

このような珍道中ではあったものの、無事シエナに到着。さあ、ここからどのような出会いが待っているのかワクワクしつつ、シエナのバス停に降り立った。

(当館元留学生)

～レストランご紹介～

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。これからの季節、名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」

下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2020年1月末まで)

『オペレッテ・モラーリ』

國司 航佑

ジャコモ・レオパルディが生前に刊行した作品のうち、詩集『カンティ』と並び評価が高いのは散文集『オペレッテ・モラーリ』である。筆者はこの作品を、最新の日本語訳に倣ってイタリア語をそのままカタカナ表記した題名で呼んでいるが、そもそもオペレッテ・モラーリという表現は何を意味するのだろうか。まず「オペレッテ operette」は、「作品 opera」に縮小辞 etto/a を付した語の複数形であり、直訳すれば「小作品(集)」という程の意味になる(ちなみに歌曲／オペラのジャンル「オペレッタ」はレオパルディの死後に生まれた単語である)。他方の「モラーリ morali」は形容詞 morale の複数形であり、第一義的には「道德の」といった意味だが、その語源であるラテン語「mos 習慣」に引き寄せて「人間の習性に関する」というような意味にもなる。モンテーニュをはじめとする 16-17 世紀フランスの作家たちがしばしばモラリストと呼ばれるのは、彼らの作品が人間の風俗や習性を観察するものだったからだ。レオパルディのそれは、道德に関する作品集であると同時に、人間の習性を観察する文章でもある。

タイトルに示されている通り、『オペレッテ・モラーリ』は複数の「小作品」からなる短編集である。短編の数は初版(1827)で 20 に上り、そのすべてが 1824 年に執筆されている。これらを初版の目次順に並べると以下ようになる。

- 1 人類の歴史
- 2 ヘラクレスとアトラスの対話
- 3 流行と詩の対話
- 4 シログラフィ翰林院からの懸賞案
- 5 人文学の教員とサルスティウスの対話
- 6 小鬼と地霊の対話
- 7 マランブルノーとファルファレッコの対話
- 8 自然とある靈魂の対話

- 9 大地と月の対話
- 10 プロメテウスの賭け
- 11 科学者と哲学者の対話
- 12 トルクアート・タツと彼の守護精霊との対話
- 13 自然とアイスランド人の対話
- 14 パリーニあるいは榮譽について
- 15 フレデリック・ルイスと彼のミイラたちとの対話
- 16 フィリッポ・オットニエーリ語録
- 17 クリストファー・コロンブスとペドロ・グティエレスの対話
- 18 鳥を讃えて
- 19 野鷲の歌
- 20 ティマンドロとエレアンドロの対話

ざっと見ていただければお気づきになると思うが、全 20 のうち 13 の短編が対話の形式を採っている。対話形式は、古代ギリシャの哲学者プラトンが確立して以来、西洋の歴史上さまざまな学術書において採用されてきた散文ジャンルの一つである。現代の我々からすれば対話形式で学術書を執筆することはかなり不自然に思われるが、西洋古代にあっては決してそうではなかった。上掲のプラトンを始め、古代ローマの弁論家キケローもこの形式の作品を多く残している。また古代文化の復興が叫ばれたルネサンス期以降も、カスティリオーネの『宮廷人』やガリレオの『天文対話』といった例を挙げればわかるように、著名な作品にしばしば用いられたものである。

だがその後、自然科学が飛躍的な発展を遂げ、学問と文学の間には徐々に境界線が引かれるようになり、対話篇は学術的な文章ではなく文学に用いられる形式とみなされるようになる。ところが、である。18 世紀のフランスに活躍した啓蒙思想家たちは、より広い読者層に自らの思想を伝えるため、さまざまな文学ジャンルをむしろ積極的に取り入れた。そこで対話形式が再び哲学的な文章に用いられるようになるのである。モンテスキューの『ペルシャ人の手紙』やルソーの『新エロイズ』といった書簡体小説も一種の哲学対話と言えるだろうし、デイドロの『ラモーの甥』はまさに対話体小説である。ヴォルテールに至っては、『エウヘメロスの対話』を始めいくつもの対話篇

を残している。レオパルディは、こうした伝統を背景に自らも対話篇を執筆したのだった(なお、『オペレッテ・モラーリ』の直接のモデルは、古代ギリシャの風刺作家ルキアノスだと言われている)。

それでは、レオパルディの対話篇の内容は具体的にどのようなものだったのか。有名な「自然とアイスランド人との対話」を例に取って考えてみたい。冒頭を引用してみよう(以下の引用は、すべて Giacomo Leopardi, *Operette morali*, Milano, Garzanti, 2000 に拠る)。

あるアイスランド人が[……]かつてアフリカの内陸部に侵入し、赤道を越えて人間が誰も到達したことのない場所に入って行ったとき[……]巨大な胴体を遠くに見た。[……]近寄ってみるとそれは地面に座る女性であった。

(p. 121)

主人公は一人のアイスランド人である。彼が旅の途中、アフリカの奥地で、ある巨大な女に遭遇したというのだ。そして、この女がアイスランド人に質問を投げかけるところから対話が始まる。

自然：おまえは誰だ。おまえの種族が足を踏み入れたことないこの地で何を探している。

アイスランド人：私は、自然を逃れて旅するみじめなアイスランド人だ。世界各地を放浪しつつ、自然を逃れて人生の大半を過ごしたのち、今も自然のせいで逃亡生活を余儀なくされている。

(p. 122)

主人公のアイスランド人が旅をしているのは、自然から逃げるためだという。アイスランドといえば、筆者はすぐに寒冷な気候と火山を思い浮かべるのだが、こうした「自然」であればそれを回避したいという気持ちはよく分かる。実際に、『オペレッテ・モラーリ』が執筆される40年ほど前にラキという火山が噴火し、甚大な被害を及ぼしていたらしい。レオパルディも当時の読者も、アイスランドという地名を聞けばまずこの天災のことを想起したのではないだろうか。しかしこの対話篇の主人公たるアイスランド人は、「自然」を逃れて世

界中を放浪した後、「自然」そのものに出会ってしまうのである。

自然：リスがガラガラヘビから逃げ回ったあげく、自分からヘビの口に飲み込まれるのと同じだな。私こそ、おまえが逃げているものだ。

アイスランド人：自然？

(p. 122)

「自然」の登場シーンはなかなか強烈である。筆者はこの箇所を読みながら、古代ギリシャのオイディプス王の悲劇を思い出した。人間は、どんなに遠くに離れようとしても運命から逃れられないのだ。

その後、「自然」を避ける理由を問われたアイスランド人は、その経緯を長々と語り出す。この世の苦しみから解放されるため、まずは人間社会を離れて自然に向かった。しかし自然の中にあっても、夏の暑さ、冬の寒さ、暴風雨や火山の噴火など、苦しみの種は尽きない。そこでよりよい環境を求めて様々な土地を放浪した。だが、どこに行っても結局はそこにあるのは冷酷無比な自然である、と。そして、質問に答えていたはずのアイスランド人は、徐々に「自然」を糾弾し始める。

そして私は思い切って次のように結論付けた。すなわち、おまえは人間の明白な敵である。そして動物の、またおまえが作り出したすべてのものの敵なのだ。おまえは我々を時に陥れ、時に威嚇し、時に襲撃し、時に刺激し、時に殴打し、時に引き裂く。そして我々は常におまえに傷付けられるか、苦しめられているのだ。

(p. 127)

アイスランド人の非難は相当に苛烈である。筆者が「自然」だったら、そんなに何もかも私のせいにするな、と言いたくなるだろう。だが、アイスランド人の言い分も、筋が通っていないわけではない。人間を生み出したのは、確かに自然である。そして、人間に欲望を与え、その欲望が決して満たされることなくむしろ不幸の原因となるように仕向けたのは、ほかならぬ自然ではないか、と言うのである。

この箇所を見ると、レオパルディにとっての「自然」は、我々日本人が考える自然とは少々異なるものように思われてくる。それは、この世界のメカニズムそのもの、人間を含めすべての事物を創造する一種の神のような存在なのである。そして、「自然」を創造主と捉えたとき、筆者には旧約聖書の『ヨブ記』が思い起こされた。『ヨブ記』は、よき妻子に恵まれ幸せな生活を送っていたヨブが、何の理由もなしに、財産と子供と健康——つまり幸福の源となるすべてのもの——を失ってしまう、という壮絶な物語だから、読者諸氏もよくご存じのことだろうと思う。これらの不幸は、いずれも神が悪魔にそそのかされてヨブにもたらしたものだ。それでも信心深いヨブは、神を疑おうとはしない。途中、紆余曲折があるが、最終的にヨブは信仰の篤さを認められ再び幸せな生活を取り戻すのであった。この物語を読んだとき、我々はしばしば、世の中の不条理に対して人間がいかに立ち向かうべきかという問題を考える。

だがレオパルディの世界における「自然」は神ではない。「自然」はアイスランド人に答えてこう言う。

それでは次のことを知るがよい。私は、世界を創り、整え、動かすにあたり、数少ない例外を除いて、常に、人間の幸福とも不幸とも全く関係ないことを考えてきたのだ。

(p. 127)

『ヨブ記』の神の場合と異なり、レオパルディの対話篇における「自然」は人間に関心がない。納得できないアイスランド人はさらに問う。

それでは訊きたい。ひよっとすると、私はおまえにこの世界に生んでほしいとでも願ったことがあったらどうか？それとも、おまえの意図に反して、私が無理やりこの世界に生まれてきたとでも言うのか？

(p. 128)

それに対して「自然」は、生産と破壊の永遠なる反復こそがこの世界の理であり、どちらかを欠かすことはできないと言う。そして、苦しみを欠

いた事物があるとすれば、それは世界に有害なものとなるはずだ、と。このやり取りの最後には、アイスランド人が印象深い言葉を放つ。

いかなる哲学者も答えられない次の質問に答えてくれ。世界を構成するすべての事物が傷つき死に至ることによって、この世界の生命は保たれているというのならば、そうしたあまりに不幸な生命は、誰が好むものかというのか。それは誰の役に立つというのか。

(p.129)

世界の不条理を巡る「自然」とアイスランド人との間のこうしたやり取りは、実に効果的である。筆者は前回の記事(Corrente345号2019年8月号)で、『雑記帳』に示されたペシミズムに違和感を覚えると述べた。この対話篇に述べられていることもレオパルディ本人の思想にほかならないのだが、二つの思想が対話の形でぶつかることによって、単なるペシミズムを越えたより力強い思考になっているように思われる。

さて「アイスランド人と自然の対話」はどのようにして結末を迎えるかという、実は先ほど引用したアイスランド人の科白の直後に終わる。突然地の文(対話以外の説明や叙述)になって、主人公たるアイスランド人が死去したことが伝えられるのだ。しかも、死の理由については、二つの仮説——二頭の獅子に食べられたか、暴風に見舞われて地面に激突したか——が提示されるのみである。なんとも不思議な結末だが、ここにもまた何らかの意味が隠されているのだろうか。

<参考文献>

脇功、柱本元彦訳、ジャコモ・レオパルディ、『カンティ』、名古屋大学出版会、2006

Giacomo Leopardi, *Operette morali*, Milano, Garzanti, 2000.

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>